

鹽  
尻  
四  
扁  
十一

1 曾 5  
508  
54





○ 信景按神代卷ノ書詠曰神以月讀尊造トコラ下土蓋取之  
 ○ 文昌雜錄云軍中以端午走馬トク謂躡柳トク  
 ○ 信景按我邦競馬走馬是之  
 ○ 款名云吐也吐生万物也

○ 信景按神代卷有此意  
 ○ 自伏羲畫卦而易之道著文王為象辭周公為  
 ○ 文辭孔子為十翼而易之道始備秦火以下筆不廢  
 ○ 唯矢詠卦三篇後河内女子得之漢初高易者三家  
 ○ 其一則始于田何之十二篇以授丁寬再傳而得魯人之

易一書

○ 子孟喜存大梁丘賀共二則始于焦延壽而陳郡京房受  
 ○ 之其三則始於費直而鄭玄王弼為皆偽之自是費氏興  
 ○ 而田何遂息至唐孔穎達作正義獨取王弼之學季鼎  
 ○ 祚之集解則取鄭而捨王陸德明之款文則宗京而尚  
 ○ 數及宋程子之傳朱子之本義出而後理與象兩明焉  
 ○ 三朋劉敞曰天子諸侯皆三門而名不同云云  
 ○ 信景按浮屠以寺門稱三門者借也  
 ○ 或曰般若三藏所譯威怒王秘密陀羅尼經曰大照  
 ○ 衆圍吾稱日神号天照大神蓋依此經之意曰言抑

末也周易の家傳曰登天照四國也。是孔子之言也。宣  
取於後世異端之書。然我天照之傳語者。何  
摩津天流於保比留采乃加養略語也。本不  
取異邦之製字。

元祿庚辰二月七日尾城下岩あり。市良乃  
家子好百戸焼失。乃分威寺大の寺を造らば  
乃什と云く。郷内の寺家母と云く。一風神の大  
殿と云く。寺意友あり。一移後りと云く。慮を覚悟  
と云く。後列の年一丹次。の月七日。と云く。家傳

夫古の志、糖、而後、行、志、を、改、め、て、成、す、事、  
す、乃、奇、凡、事、付、是、あり、と、云、く、一、り、し、り、し、り、  
て、六、の、如、く、一、の、次、人、世、に、と、居、り、ぬ、り、  
人、力、を、あ、り、こ、り、し、り、し、り、し、り、し、り、  
と、云、く、一、の、若、き、と、云、く、の、り、ん、や、若、子、若、  
弟、と、云、く、命、と、候、の、と、云、く、故、と、云、く、一、つ、を、  
く、と、云、く、一、つ、を、  
○ 葉隆礼所撰遠志曰契丹之始中國簡冊  
有所不載云々相傳有男子乘白馬浮土



道非異神。但依勸請。故異祠号。造祠亦  
有故習。是亦後世好事之說。而往古無  
此說。凡造社之制。出宝龜勅宣。無天道  
造也。  
○ 按凡五山。温泉。我土。他土。其為湯之。其  
舒。明。天。皇。の。二。年。林。九。月。の。初。ま。り。し。り。本。紀  
母。の。り。又。同。一。十。年。の。初。ま。り。し。り。伊。勢。の。國  
々。家。々。の。若。德。天。皇。の。初。ま。り。し。り。武。庫。の  
初。ま。り。し。り。還。居。あり。し。り。記。事。の。初。ま。り。し。り。我

帝神無元年。傍の初。基。為。志。山。温。泉。寺。と  
建。多。の。り。佛。字。を。父。の。り。不。解。門。院。永。德  
元。年。温。泉。の。湯。水。の。長。文。あり。し。り。山。宮。の。り。し。り。温  
泉。既。没。し。り。あ。り。し。り。後。の。り。院。の  
建。久。年。中。相。良。寺。院。の。傍。仁。面。温。湯  
の。處。説。法。の。り。ゆ。り。し。り。自。り。し。り。今。の。り。目。の。り。し。り。湯。の。り。山。の。り。徳。八。麻。古。之。湯。の  
二。社。之。仁。面。徳。整。の。初。と。建。多。の。り。父。の。り。又。之  
瑞。登。大。母。の。り。今。の。り。我。男。子。の。初。の。り。湯。の。り





ありしに官位を昇りしはけりしに  
いれりしに一義久の逆礼の後には王  
家重く福食のり初め志すをせりしに  
形ゆきしと情の多しとて官位の後刑  
ももろくして交主及び天下の事  
浮屠民とてしるしに候りしに  
半世に同院実権に同一心なれりしに  
せられしに重く候りしに  
人成り候りしに重く候りしに

道を初めしに  
金ねるに  
持守のたより

○ 柳管立れりす法ありしに  
他人の事あるに他人の情  
一夫の事あるに一人の事  
あるに一人の事ありしに  
あるに一人の事ありしに  
あるに一人の事ありしに  
あるに一人の事ありしに



乃有之と云ふなり

○我敬公薨玉フ前有以獻一鋪古墨跡其文曰  
天五士ト是天數之五生士之謂ラ而讀者以為  
天五十一ト天共一代倭音近シ然レム次ノ年  
五十一ト而薨國人以爲識焉按采張端義  
貴耳集曰本朝年号或者皆有識緯於其  
間太平有一人六十卒ノ字太宗五十九而上  
仙ト云可謂異域同日之談ト也

同集又曰天聖曰二聖人朋道曰日月

同道靖康曰十二月立ト康王嘉泰曰士  
大夫皆小人有力者嘉等ト云異邦折  
字而相ト術皆識緯變風也

○王摩詰集ト云幸ト山ト澤ト日ト長ト河ト急ト  
○或人曰ト同ト休ト問ト休トのト願ト童子ト之ト代トノト氏ト  
○或曰ト四ト記トのトたトくトるトまトとトんトのト丹ト皮ト回  
○節ト多トのト神トにト深ト打ト克ト知ト術トのト凶ト賊トとト海トせトれ  
○時トのト形ト書トありト保トのト不トのトまトをト之ト信トとト教ト書





ヤシて人心の如し

○ 魯三家原始 依或人之書記之 庚辰五月廿一日也

問昔魯國鄉三家有丁驕僭不臣也所謂孟

孫氏叔孫氏季孫也然<sup>ル</sup>季氏庶家其疆

大孟叔增<sup>ル</sup>何シノヤ答<sup>ル</sup>私古記ヲ按スルニ魯

ノ初伯禽ヨリ十五世ノ主桓公存ノ襄公ニ殺サ

レシ後莊公立テリ莊公黨氏が<sup>アヘムス</sup>孟女任愛メ子

班ヲ生シム

子班長メ梁氏ノ女ヲ説<sup>トク</sup>ヒシ圍人擘ト云者ヒツカニ

彼女ニ戯ルヲ觀テ怒リ擘ヲ鞭ツ下<sup>リ</sup>其<sup>レ</sup>後

有後<sup>ニ</sup>擘班ヲ殺モ故アリ

莊公ニ三人ノ弟アリ長ヲ慶父ト曰フ<sup>カ</sup>孟氏<sup>次</sup>ヲ叔

牙ト曰フ<sup>カ</sup>叔祖<sup>次</sup>ヲ季友ト曰<sup>ク</sup>季氏<sup>祖</sup>是三家人祖<sup>ト</sup>

然メ莊公存國ノ女ヲ取リテ夫人トス<sup>哀姜</sup>夫人

子無シ其<sup>イモ</sup>嫡<sup>ヲ</sup>ヲ叔姜ト云ヒシカ幸セラシテ男ヲ生ム

コレヲ子開ト云 系本ニ啓ト云漢ノ景帝ノ諱ヲ避テ史記ニ開トシルス 莊公其本夫人ノ

子ナケレハ子班子開共ニ適嗣ニアラス其上莊子孟

女ヲ愛スル故コト七年モ長セシカ公子班リ立テ嗣ト

セント思へり然ルニ莊子病ニカ、リ卒セシトセシ時  
弟ノ叔牙ヲ呼テ世子ヲ立シトヘリ牙カ曰  
魯國昔ヨリ父ノ跡ヲ継モアリ兄ノ跡ヲハ弟  
ニ及スモアリ慶父ハ君ノ次ノ弟ノ嗣ト為ヘシト  
云莊公ハ叔牙カ慶父ヲ立シトスルノ患ヘス季  
友ニ問ハレシニ友カ曰班ハ君ノ子也我シ死ヲ以テ班  
ヲ立シト云莊公曰先キニ牙カ慶父ヲ立シト云  
ニカハ是ヲ如何セント季友計ツテ魯ノ大夫鍼  
季ヲシテ鴆毒ヲ牙ニス、メ飲シメテ殺シ其子

ヲ立テ叔孫氏トス

杜氏曰罪ヲ以テ誅スルニ非ス故ニ後ヲ立テ  
其祿ヲ継カシムト云ヘリ

既ニメ莊公薨セリ季友即子班ヲ立テ魯公ト  
ス然ル所ニ慶父己カ立サルノ怒リ圉人犖初子  
班ニ恨アル者ナルノヲ知り彼ヲメ班ノ殺セシム季友  
カタラス其難ヲ避ケテ陳ニ去リ慶父自ラ位ニ  
即クモサスカナレハ一先莊公ノ次子圉ヲ立テ君トス是  
周公也史記作氏慶父是ヨリ驕リイマシメ莊公ノ夫人

哀美ト密通メヒソカニトボクイ騎ト云者ヲメ肉ムヲ弑セシ  
メ慶父自魯ムトナラント計リシカ季友己ヲ聞陳  
ヨリ肉ムノ弟子申ト臣ニ邾ノ國ニ往テ兵ヲアク魯人  
モ亦皆慶父ヲ誅セント欲スル故ニ慶父國ニタニラレ  
ス出テ莒ノ國ニ奔シリ季友即子申ヲ率メ魯ニ入  
リ君トセリ是僖公也史記作シリ季友莒ニ往テ慶  
父ヲ求テ飯リ人ヲメコシテ殺サシム慶父ヲ後ヲ孟氏ト云  
以此見ルニ叔牙先ニ殺サレ慶父後ニ害セテ兀獨  
季友公室ヲタスケテ功有リ故ニ僖公己レヲ立ルヲ

悦ビ汝陽ノ鄭ト云地ヲ以テ季友ヲ封メ相トス  
僖公立テ季友政ヲ專ニス故其子孫強大ニメ公室  
ヲ無セシモ是ヨリ起シリ其後僖公薨シ文公立テ  
三子有リ長ヲ惡来ト云次ヲ視ト云次ヲ子伋ト云へ  
リ文公薨メ子伋公子遂ト云者ヲ史記ニ仲襄頼ニ  
齊ノ國ニ分リ合テ世子子惡ヲ弑シ伋自立テリ  
宣公是也始ニ季氏僖公ヲ立今遂宣公ヲ立故ニ  
權柄皆臣ノ手ニアリテ君ハ空名ノニ以此公室日々ニ  
卑メ三家年々ニ疆シ宣ス彼ヲ去ントセシモカナハス

〇 冕セリ成ム衰ムヲ経テ昭ムノ時三家ヲ滅サント  
 セラレシカ事不成而却テ三家公ヲ伐ツ遂ニ公出  
 奔メ後他國ニシテ卒セリ魯人共ニ昭ムノ弟采  
 ト云人ヲ立ツ定ム是也三家増ク盛ニ也定ム冕メ  
 衰ム立魯君ノ國政ヲ失ヘル久シ孔子ハ定衰  
 ノ時ニシテ三家驕僭ノ日也論語三家ヲ云ヘル  
 丁多シ此レヲ考ヘテ其時ヲ知ルヘシ  
 〇 宋ノ國子司業其宗義カ所著スニ礼圖ニ曰衣  
 冕云古ヘ天子ノ冕服ハ十二章王者相變シ

至周而以日月星辰畫於旌旗所謂三辰  
 旂旗照其明也而冕服九章之云々冕服皆  
 玄衣纁裳朱黻素帶朱裏又朱緣ヲ以テ終禘ヲ云  
ノロキヤミ アカクノモ アケノヒツホシ シロキ  
 信景按冕服之色此書謂之詳也予初  
 尙識者而無知之者幸今繙此書得ク之  
 備遺忘耳

〇 兵を稱するは兵位の小なり兵徳の小なり兵威の小なり  
 兵ありては民之なり是兵士の字にありては兵  
 の防身之兵士を礼の王侯に兵士を

よあり注り通るの處士なりと云く又其後  
改有漢流の兵士の号高田の時執出ると云り  
韓非子と稱するは用ひて兵士任高幸仕を  
よ兵士二人よりより一より一は兵士は  
石はの号處士と同しと云く之が辨詳等  
考へるなり又御書と云くも兵士小王將  
軍長者兵士軍官流家等の別を分けて  
といふ今王侯は兵士も兵士といふは  
分りいふなり

宋景濂集曰東ノ曲ノ注曰其國購得テ諸書悉  
官判之字々此間同但讀之者語言絶異  
又必侏離順之讀下後逆讀而上始為句  
所以之義虽通而其為文終不能精暢也  
云々

按 我國讀書有字音有和訓直讀  
逆讀而後得其義故比異知讀書者  
則不其只勞耳又誤文義者不少學者  
深理會字義可之

○ 少希家記ありしなりのおろしきいし一何民こゝと  
所おしりしなりその多うししその中より  
秋のたけんとてなりその二そのの初秋とてなり  
返りたりしなり

えんくわししまりの光わしつれてそのすをけ  
わたり

仲はなまはるもいひまををけしけしけし

○ 希子の書多くハ慎の字無し是希字は願障と  
遊せうり 我回あふと筆をり人きりしは  
ししと希希希子の書と海より人先りし事と

○ 希子の書多くハ慎の字無し是希字は願障と

○ 亭景尽 長亭短景無人盃

○ 老節節 老大横挽し 瘦行節

○ 首雲暮 回首断雲斜日暮

○ 江灘峯 回江倒醮小山峯

一夕話

○ 譲と謙と固小ありし事ありし水南子一所  
謂蒼吾抗りし事ありし我兄不譲り抗性曲を  
し不憚黄公已り女心謙しと醜しと云い

塚一かきしりしり新いふ編委のりしり  
不列

○ 尼丘之山三倉合而為臨暗章貢之水後人  
合之而為顛繡

○ 伐碎編十二ありは新行ありみ柱の  
首字極と書ス非也本字、繡の字なりなり

○ 或人問隱士石川丈山号凹凸窠ト云隱居之地  
楊ト云の字と同一くはとも

○ 有山嶺凹凸故所名ト云欵曰不知丹鉛錄曰盡  
記云張僧諒盡ト云

○ 一乘寺壁望如凹凸近視則平ト云名曰凹凸  
花俗呼一乘寺為凹凸寺ト云丈山退隱  
之地我洛良一乘寺村也故名ト云之云

○ 本朝以西域之神立祠祭之者若牛頭天  
王社辨弋天祖吉祥天社妙見社等是也  
以漢士之神立祠祭之者若山王社赤山  
明神新羅明神泰山府君等是也我邦

○ 有山嶺凹凸故所名ト云欵曰不知丹鉛錄曰盡  
記云張僧諒盡ト云

○ 一乘寺壁望如凹凸近視則平ト云名曰凹凸  
花俗呼一乘寺為凹凸寺ト云丈山退隱  
之地我洛良一乘寺村也故名ト云之云

○ 本朝以西域之神立祠祭之者若牛頭天  
王社辨弋天祖吉祥天社妙見社等是也  
以漢士之神立祠祭之者若山王社赤山  
明神新羅明神泰山府君等是也我邦

○ 有山嶺凹凸故所名ト云欵曰不知丹鉛錄曰盡  
記云張僧諒盡ト云

○ 一乘寺壁望如凹凸近視則平ト云名曰凹凸  
花俗呼一乘寺為凹凸寺ト云丈山退隱  
之地我洛良一乘寺村也故名ト云之云

人以是等<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>主<sup>キ</sup>蓋<sup>シ</sup>鳥<sup>ノ</sup>尊<sup>ト</sup>為<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>己<sup>ノ</sup>員<sup>命</sup>為<sup>レ</sup>倉<sup>箱</sup>  
魂<sup>シ</sup>之<sup>ト</sup>類<sup>甚</sup>多<sup>シ</sup>矣<sup>以</sup>天<sup>照</sup>大<sup>神</sup>為<sup>レ</sup>大<sup>日</sup>以<sup>ハ</sup>八<sup>為</sup>  
幡<sup>為</sup>彌<sup>陀</sup>類<sup>則</sup>人<sup>皆</sup>知<sup>ラ</sup>習<sup>合</sup>家<sup>作</sup>為<sup>レ</sup>之<sup>而</sup>  
而<sup>不</sup>辨<sup>若</sup>牛<sup>頭</sup>山<sup>王</sup>等<sup>異</sup>邦<sup>ノ</sup>神<sup>ヲ</sup>而<sup>以</sup>我<sup>國</sup>  
國<sup>神</sup>牽<sup>附</sup>之<sup>予</sup>本<sup>地</sup>岳<sup>跡</sup>之<sup>説</sup>為<sup>レ</sup>表<sup>理</sup>也<sup>也</sup>  
若<sup>夫</sup>如<sup>富</sup>士<sup>住</sup>吉<sup>等</sup>者<sup>本</sup>朝<sup>地</sup>祗<sup>也</sup>然<sup>諸</sup>  
國<sup>立</sup>其<sup>社</sup>祭<sup>之</sup>魚<sup>不</sup>異<sup>邦</sup>之<sup>神</sup>而<sup>亦</sup>非<sup>禮</sup>  
耳

右神宮の千木堅魚木心御柱等ハ神秘口訣に

此<sup>レ</sup>化<sup>家</sup>知<sup>不</sup>能<sup>之</sup>の<sup>但</sup>延<sup>唐</sup>太<sup>神</sup>  
宮<sup>儀</sup>式<sup>帳</sup>に<sup>上</sup>搏<sup>風</sup>肆<sup>救</sup>長二丈八尺弘サ八寸厚四寸号<sup>ノ</sup>稱<sup>也</sup>  
此<sup>木</sup>釘<sup>覆</sup>大<sup>耳</sup>堅<sup>魚</sup>木<sup>長</sup>七<sup>尺</sup>徑<sup>一</sup>尺<sup>七</sup>寸<sup>找</sup>木<sup>別</sup>端<sup>也</sup>  
以<sup>金</sup>鎊<sup>云</sup>此<sup>ハ</sup>延<sup>唐</sup>心<sup>前</sup>之<sup>令</sup>之<sup>鎊</sup>之<sup>の</sup>  
其<sup>の</sup>神<sup>宮</sup>雜<sup>事</sup>記<sup>の</sup>説<sup>也</sup>  
後<sup>永</sup>祿<sup>元</sup>年<sup>の</sup>初<sup>ノ</sup>々<sup>堅</sup>魚<sup>木</sup>の<sup>凡</sup>是<sup>木</sup>ノ<sup>右</sup>端<sup>泥</sup>障<sup>板</sup>右<sup>端</sup>鞭<sup>掛</sup>端<sup>等</sup>  
之<sup>の</sup>今<sup>等</sup>被<sup>奉</sup>加<sup>粧</sup>之<sup>如</sup>之<sup>字</sup>々<sup>也</sup>  
此<sup>初</sup>之<sup>今</sup>之<sup>粧</sup>之<sup>也</sup>之<sup>也</sup>上<sup>吉</sup>



善哉句んたりと云物と見く去る  
堅魚カツノ  
の名を万葉にも見くこれ等古事旧来の  
言人扱心法柱を左神宮或北法北法カクテ早北カクテ  
物忌法將基北北城心法柱穴穴神皇堅柱其  
築平ツキヘイ殿地ラニ是則法柱をの物なり柱を  
殿片のの中をより去るは神古家道の造り且  
此より足より今日の風俗も家柄も殆ど柱立  
やと一柱の柱を去る工匠法柱をとりいす下  
殿字紀の室室ホキ壽ホキの中ツキヘイ築立柱者此の家長

御心之法之少くも造元堅柱のタニコト榊ホト之  
凡上代何の象と云ふたりと云ふは流や秘次  
は流の流たりんや流世制定りて流も象と云  
自心理を去るといふは多し或は去る物と祝  
ふ。榊ホト之流の人の流と秘とせしむる  
少く且陰陽家の北法あり混と云ふあり  
或は密字の北法よ今も心程をのみ流柱と云  
流の流たりんや流世制定りて流も象と云  
凡上代何の象と云ふたりと云ふは流や秘次  
は流の流たりんや流世制定りて流も象と云  
自心理を去るといふは多し或は去る物と祝  
ふ。榊ホト之流の人の流と秘とせしむる  
少く且陰陽家の北法あり混と云ふあり  
或は密字の北法よ今も心程をのみ流柱と云  
流の流たりんや流世制定りて流も象と云

王臣及び神家とて佛法とのみならず  
 にはりともく、中世流々、異俗、  
 未だ世に、  
 及び大義等の記を、淮南子等の雜家  
 記の臨臨の言を、  
 及び、  
 のみ、  
 のみ、  
 のみ、  
 のみ、

下字集及兼邦が百を、  
 毎書の字と附合せし、  
 及び、  
 のみ、  
 のみ、  
 のみ、  
 のみ、

衡門カウモシ之元亭執書書

我國の神祠の三つに於ては、  
志村所には、  
つあり是をいふといふに  
多を指を及く古所を忘れ  
況あり

○ 壬午の春に或の人から来るといふ

八十ありひつゝの古所は  
我府下社をいふる流着同年の  
一平二下くつ流くも二平六中くつ

一平二下くつ流くも二平六中くつ

○ 壬午二筆

括異志に家内の至和中成都の費孝之  
之の古所は北に流く一老人の  
懐り即ち直と僕とせしむる人  
之を下と視るやと考へ是を  
之を年月日述ふとの年月日  
ありし日即某年月日ありし  
是を之とせしむるやと考へ  
之をその一膳の着る人百

摩多舞のあつたをいふも同く其人區々  
多きを偏ひたをいふも同く中人悔く  
命りやまんせきるいふも同く此理をいふ  
心物世間いふのや

○ 山城の四橋神社

イナリノ名義説く方 予 橋氏ノ橋

依此女命多々大歳持神の子なり等

イナリハイナリノ轉語也

○ 名古之左衛門某、尾尾也、知教、古酒村

人也其父謂源左衛門某曾仕森武藏守  
移居于濃州兼山天性羨群而治客自喜  
且好武藝輕率為行一旦武藏守欲殺某  
臣某氏而使其遺他州將刺于路名古屋  
氏請曰願使臣擊之則足武州以其年少  
且質美惜之不許名古屋氏再三請之不  
止於此竊屬一勇士遺之名古屋氏獨急走  
与某氏闘于路殺之然名古屋亦蒙疵而死  
始名古屋於尾州領五十貫之地云

是往日所聞。沢井楓軒老人也。按雍品  
府志。以名古氏為京師戲場男風之  
始。不知孰是因云。關東小六者。本伊達氏  
某僕。在東都而游俠於曠。當時呼之稱  
伊達小六。今以治容游俠者。曰太天テイト似  
彼シカ人風也。

○英法士廣尼の松尾寺に女代の比丘尼は縁  
あり尼寺今沢紙後寺殿時の女寺なり是利澤原  
寺源右代の法書に尼の法後小部家母句に云英尼

と云ふ如左縁原と号せし婦人松尾寺に存成  
原寺に在り八月十八日歿すなり水邊に在り  
阿彌陀佛を念ふと念ふと念ふと念ふと  
左邊に在りし松尾寺に在りし  
うまのついで  
後より徳倉より佛光回廊小福より至り  
入りて至り一回廊に在りしと云ふと云ふと  
と云ふと云ふの縁原に在りし

徳倉志千子ノ城隈奥守平泰盛ノ女ノ人

紙巻の末に附く家書あり

○ 壬午の二月廿初ツ夕當り西より白鳥の鳴く  
鳥の鳴くや名は是等やして年を止るは  
之より一毎夜り女一々中夜不眠を  
終るまは七月十の日の朝日す向い  
人もく名も中も名も一々や  
名は作次一見一人も年より  
り編りて名一雨の方々  
さくあり一皆ありて後の雨の方  
か消く

○ 白鳥の鳴く一拘り一は是等  
初一りのよ小物雲り  
如く一とよ名も多し  
名夫の名一はせ一  
未世の事一は  
さるや

○ 成人の事一は馬の  
人の名も多し  
その事一は

名をいふと一之り別くハその多ありき  
カハニ云々正イカ豊方の唐名ハ豊方多々新語ニカキ  
之もその類抄程を一一本邦の集解  
名をいふ

○ 倭俗以三月三日為海潮盡期按銜積霏  
雪錄云海扇海中甲物也云々三月三日潮盡  
乃出云々然則金異邦以三月三日為海潮退  
盡期ト

○ 沃浮とわりのこと松洲所抄云々本邦のあま

いふ考れをわりの小あまの意姑ハ  
たもだりなり

△ 世帯木指掌圖

○ 世帯系 冠ノ秋派

上本病下病堂上地下の病のつらう糖いには名を  
納公参議の世帯ハ下世帯の世帯系の世帯系の世帯系の世帯系  
あま〜世帯ハ公々をうし小あまを名に上は世帯の世帯の世

表袴 下袴  
 布八寸よりかきつきの丈のわろか——位六位の未嘗仕  
 たるも庭八寸半比もわろくつきのわろ位六位の堂上地を  
 けし履ききききの靴ひとは男中をわろ紐履より履く未嘗  
 替ふもききき人のわろ那衣人より袴履のわろきねきき  
 二位の沖の極高字の位階履ききき衣府袴のききの位  
 の官人指半の丈ありおききき又替ふとありしききの人  
 指半の細又これききき後次為ききのわろくつきの  
 堂上地下もききのわろ半結の未嘗履ききき一貫の又  
 看用次第

先冠 懸緒 次赤大口 次襪 次表 袴  
 次大帷 有復々々 次裾 有復々々 次位袍 有復々々  
 次石帯 次劔 年揃 次笏  
 次浅履 或緒太  
 正從一位

正一位者現在之人不叙之從一位或撰園  
 或大臣或前官大納言叙之  
 掾袍正曆以来被着之大臣者異文依  
 家々替有之

○ 正從二位

年勞ノ大納言叙之或攝關叙之或左大臣  
或二位ノ中將有之

袍同上大納言以下文或與唐草或瑞雲

二依家例

○ 正從三位

二位以上是么々位之納言冬淺冬深  
叙之或三位中將有之

袍同上

冬淺冬深為位位是么々卿之故袍下  
春袴指貫等同  
三位以上下並兼春袴又指貫是文下  
三位志有袷家袍ノ又用右但下袷表  
袴指貫本儀之文之雖是或指貫或指  
冠ヨリ指貫而用者文下

○ 正從四位上  
下

位位以下初位以上搦テ云法儀但位位冬淺志  
二卿之別之亦位位中少將是人辨官也納言

仍從皆當之

袍同上西唐以素以上一回二極，又之以下指素絳，  
以位以下素上地下一回三極，又指素絳，又  
紫緯白或紫，平絳之地下及左

雖以位左臣，子孫又為人皆隨禁，宮殿下  
指素絳，指素等內公卿有文地，下位志  
卯化史或誌寮，法司，官人又社家之袍下  
指素絳，同右但指素，又指素平絳之  
武家阮雖中少將仍及板，以用紫，指素，

淺黃，緙白之

正從五位上

或以將辨官，為人少納，公仍從，以府姓，統  
以下叙之，是素也

袍緙，又下指素，素絳，指素同上

此以位，德，禁，又之人，又為人，亦下指素

素絳，指素，等同上，但袍，又用緙，地，下

以位，志，卯，化，史，或，誌，寮，法，司，官，人，少，社

家，之，或，內，人，叙，以，位，之，袍，又，同，右，之，素

同上

由家流諸方丈七位六位指費成矣

平終

正從六位上

六位為人亦地下ノ諸日官人叙之

袍孫受文六位以下惣母文之又下袍孫

袴指費同上

雖六位為人下袍孫袴指費等同一袍

又下用孫于中袍為八袖麁ノ袍着之是

袍服之中

地下少知記以下諸日ノ官人又社家叙之

袍以下同右を代武家ノ人不叙六位

△輻輳故事

○後古法所流沙慈九年母家流形在二表徴

の目あり一は疾葬提御儀あり一は買提

しあり一は内儀の思戸に並あり一は

既に四十餘日漸少して泉涌寺に葬

あり一は也

後柏系院踐祚より二十二年の後  
大永元年母法良位の禮を以て家元も又其禮  
別加正しつゝ西三條の實際を以て慈之  
本教寺の傳信業院殿如に議り費料を  
乞ふが如くもつゝ別分れしを先  
仍も殿如と大信正に似し内治の事  
多しと家元もん

後を少良院踐祚の後十年天文七年母法良位  
の禮あり大内義隆費料を進り一及大宰

大貳小補せしれ一之正親町院踐祚の後元年  
永祿三年母法良位の禮あり一毛利元就  
費料を進り一多々大指方美り可しとされ  
多々やつとや

鳴呼四君喪礼の極小あり多しか系北道の  
上と云えあり一は時法別大母礼を杖簾給  
せり一は云卿意鄙に離都一法儀り  
容合せしは又多一將軍家中に在り位  
の女持り職の女持りとせりされ名高富貴

夫命あり人力のやうな事ありあつて  
いふ所之に事なしとてもけ新園よりあつて  
かふ流やうなりぬれぬ力多し負ふた人のまゝ  
是を患つた心を失ひ修むるを、其下流を  
りり今の人或は不義の高をたのしむるを  
兼みわたり或は深念の心を和く天念を  
たのしむるありぬれぬ。薦福は  
碑石を又流し雷母を流し人といふ世に  
自れあり布衣にありて流るるを

既月利活曉看雲滿大虚  
ハコトハ一集の戸に月花ありたり花も  
ありたり

人分百歳七十稀一分  
竹年ノまま多カ款来し多カ惚此心  
とよむる

玉葉集十八にあり

○ 大樹御母公御位記

藤原朝臣光子

右可從一位

中裕慈息益深温榮克々倭仰顯賢德大  
幸舉無疆壽宜授榮將以冠朝章可依

前件王者施行

韓文云蓋棺事始定

嗚呼人心危如雲雨豈於在世定其事  
可否唐明皇開元之治淳文已去無出  
於其右然至天室國亂遷都實不筑

佳城前不可輕定其事

古歌

多む心いそがきんたのうらまは心あり  
人心すゞくかみのこころのよのそもく  
此やありけり定乃くそゆ系男女の情々  
うらまは心いそがきんたのうらまは心あり  
けり多む心いそがきんたのうらまは心あり  
これやけり定乃くそゆ系男女の情々  
やんやんたのうらまは心いそがきんたのうらまは心あり

世と世も人ごとと云

○ 母後の信候より一よりありて死流の海を免る  
糸にりの心候を子ありてこれかきまゝに

首よりうらうら

此より一老をねと感し信下れをいん

日本之云々

新海に八幡の福人八幡に我身多候云々  
その代の信候も知し夫就海軍  
ありてとあるとてき福を祈ふ候も

山の上の信候一紙を信候や 八幡は云々の  
と護神と云ふ武勇の人也を甲に  
多候を壽命長きを求む神人  
命より一紙のみ多しと云ふ云々  
是れハ  
多福吾疾皆去りて祈りて求む  
之候也人佛神也と云ふ云々  
此れハ  
むらゝい邪

問津閑筆

唐子西庚失茶具戒婦勿求婦曰何也應

又云彼竊者必其所好也得其所好則宝之亦安置之則是物也得其所託矣人得其所好物得其所託復何言哉婦云嘻是鳥得不貪輝亦云聚而必散物理之常之

此併世人一室之微也之也其是也夫一其  
惺々々々おろおろ其の由何べ有流下云  
宜強を失ふは以て其の海方は其のくを河を  
以て乱るは不可得聚而必散の理を以て  
これ其の可なり也

○ 亦指大納公源通長は其後より

家業のこころを其の感し

下れりり付收ひし

亦指大納公源通長

其の光代くも其の

亦指大納公源通長

向の身もけく

あ

○ 伺候に於公卿之門奔走於形勢之途足將

進<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>超<sup>シテ</sup>起<sup>シテ</sup>口將<sup>シテ</sup>言<sup>フ</sup>而<sup>シテ</sup>其<sup>テ</sup>嚙<sup>ク</sup>皮<sup>ヲ</sup>汚<sup>ク</sup>鐵<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>差<sup>ス</sup>  
觸<sup>ル</sup>刑<sup>ノ</sup>辭<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>誅<sup>ス</sup>戮<sup>ス</sup>僥<sup>ニ</sup>倖<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>萬<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>老<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>後<sup>ニ</sup>止<sup>ム</sup>  
退<sup>ク</sup>

送李愿叟盤谷序にかくハシ

鐘<sup>ノ</sup>而<sup>シテ</sup>義<sup>ニ</sup>重<sup>ク</sup>卿<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>

軍<sup>ノ</sup>少<sup>シ</sup>次<sup>ニ</sup>孫<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>花<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>浪<sup>ル</sup>に<sup>シ</sup>交<sup>ル</sup>疾<sup>ク</sup>た<sup>ル</sup>ん  
以<sup>テ</sup>浦<sup>ノ</sup>み<sup>む</sup>り<sup>一</sup>庵<sup>ニ</sup>より<sup>シ</sup>酒<sup>ヲ</sup>也<sup>一</sup>銅<sup>ノ</sup>鑪<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>く<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>り  
長<sup>サ</sup>二<sup>丈</sup>八<sup>尺</sup>余<sup>ヲ</sup>之<sup>ノ</sup>了<sup>ル</sup>宗<sup>ノ</sup>徳<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>堂<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>九<sup>尺</sup>有<sup>リ</sup>射  
與<sup>ニ</sup>氏<sup>ノ</sup>父<sup>ノ</sup>明<sup>年</sup>仲<sup>日</sup>の<sup>ノ</sup>禱<sup>ヲ</sup>と<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>賜<sup>フ</sup>ト<sup>シ</sup>也<sup>一</sup>

家<sup>長</sup>石<sup>松</sup>和<sup>泉</sup>守<sup>氏</sup>實<sup>吉</sup>向<sup>形</sup>守<sup>氏</sup>明<sup>代</sup>  
令<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>領<sup>ル</sup>内<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>民<sup>及</sup>ひ<sup>ハ</sup>善<sup>人</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>先</sup>々<sup>々</sup>に  
風<sup>を</sup>長<sup>ク</sup>し<sup>一</sup>し<sup>一</sup>は<sup>ハ</sup>海<sup>神</sup>也<sup>一</sup>惜<sup>む</sup>ん<sup>ん</sup>々<sup>々</sup>  
及<sup>リ</sup>た<sup>ル</sup>也<sup>一</sup>

在<sup>リ</sup>宗<sup>ノ</sup>徳<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>軍<sup>ノ</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>書</sup>に<sup>シ</sup>一<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

一<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

評<sup>判</sup>書<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>宮<sup>ノ</sup>造<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>造<sup>ノ</sup>迷<sup>宮</sup>料<sup>ノ</sup>秋<sup>ノ</sup>来<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

是<sup>レ</sup>天<sup>正</sup>十<sup>年</sup>二<sup>月</sup>十<sup>日</sup>平<sup>信</sup>長<sup>ノ</sup>東<sup>三</sup>國<sup>ヲ</sup>攻<sup>メ</sup>て<sup>ハ</sup>  
多<sup>ク</sup>行<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>也<sup>一</sup>と<sup>シ</sup>宮<sup>ノ</sup>造<sup>ノ</sup>迷<sup>宮</sup>料<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>二<sup>十</sup>



川をりといふ句

おののちもはるふりか

道きくは流れ流れのきもはるふりか

△凝寂堂筆記

○漢武故事云景帝時延尉上固防年カ徒母陳氏殺年父年因殺陳依律殺母大逆論帝疑之詔問太子太子對曰夫繼母如母明其不及也緣父之愛故謂之母カ今繼

母無狀半殺其父下平之日母恩絶矣宜  
与殺父者同不宜与大逆論帝從之議者  
稱善下云

○庚辰の季秋西郊河内平の處に於て古林  
秋掃けく拉人穢之幽徑風をくく宿鳥  
ありまゝむくく光仁の西河内掃墓記是後  
子光麻呂をくく死して返魂香を焼く  
あつりくくや世俗蘇り香物の多かりくく  
古き所はれは刻々人句をくくや正法寺の内母



○司馬公曰君要聞其過則忠化為佞君樂  
聞直言佞化人為忠

批上一覽

司馬子十科舉士法

行義純固可為師表  
節操方正可為軌範  
知勇過人可為將帥  
公心聰明可為監司  
經術精通可為講讀  
學問該博可為顧問  
文章典麗可為著述  
善聽獄訟盡公得實  
善治財公私俱便  
練習法令能折請讞

元祐九年秋七月奏立

○我今年致仕歸故鄉仲冬廿九日夙發江  
戶邸臨別賦詩遺男九成父不如點信口  
漫道一笑胡盧

七

元祿庚午冬道跡東海濱致仕解印綬  
縱作葛天民盤施廣莫野洗滌榮辱  
塵昔誕首陽薇今美安江蓴三十有年  
耒夙志忽不存予去又何處不知再會辰  
嗚呼汝欽哉治國必依仁禍始自圍門

慎テ勿乱五倫朋友尽礼義且暮慮忠純君必  
古謂蚤不君臣不可不臣

梅里光國

前按中納公光國卿宣休の時細條卿へまじり  
せしれしとやあつれを後り守康志もまわ  
やうみまこころをさふ

。 雙角五爪ノ龍ハ天子服御之彩紋也臣下ノ三  
爪龍也今畫龍一為三爪倭畫工不知有  
五爪龍也

